

12章

テーマ: ナタン、彼の罪に関してダビデに立ち向かう。ダビデ、悔い改める。

ナタン、彼の罪に関してダビデに立ち向かう

神さまは、ダビデの大きな罪を見逃された、と言う批判者たちは、明らかに物語の全部を読んではいません。このあとも読み続けなければなりません。ナタンがダビデを彼の罪に直面させたとき、ダビデは悔い改めます。その悔い改めにもかかわらず、ナタンはダビデに対する神さまのさばきを宣告します。ダビデは、人は自分の蒔いたものを刈り取るのだということを学ばなければなりません。

神の人も、罪に落ちることがあるかも知れませんが、彼は罪の中にとどまることはしません。そのことが、世のひとと神のひととを区別します。羊も泥の中に落ちるかも知れませんが、できるだけ速く、そこから抜け出します。豚は泥の中にとどまって、泥を楽しむのです。

神さまは、陶器のように、人間も形を損なうことがありますと言われます。ひとつのきずが、高価な陶器を台無しにします。商人はそこにきずがあることを見つけると、価値のある物を安売りします。田舎を歩き回るとき、私は安売りを見つけるのが得意です。安売りをしているのを見ると、私は店に駆けつけます。ふつう、一級品がきずのせいで二級品になったものを見つけます。小さな欠陥のために、商品が値下げされています。今、ダビデは自分の罪のゆえに値下げされなければならないのです。

11章では、ダビデの罪の暗さ、醜さを見ました。神さまのみことばは、手加減しません。神さまのみことばは、ダビデの行動を取り繕うことはしないのです。彼の罪は墨のように黒く、夜のように暗く、サタンの下側と底無しの穴のように低く、地獄のように深いのです。ダビデは“罪を犯しました”。

ダビデのしたことは主のみこころをそこないました。そして神さまはそのことについて対処されます。ご存知のように、神さまは人間の罪を処理してくださいました。神さまは、十字架で死ぬためにそして罪の代価を支払うために、イエス・キリストを与えてくださいました。罪とは、それほどに極悪なものなのです。罪はあまりにも黒く、ご自分の御子の死を必要とする、と言われたのは神さまです。もし神さまに背を向けるなら、あなたは失われています。でも、もしあなたが神の人であって罪に陥ったなら、神さまはあなたを取り扱われるのです。

11章は、ダビデが独りよがりの自己満足のうちに王座に座しているところで終わりました。彼は、自分の罪を上手くやりおおせたと思いましたが、それは間違っていました。彼は一生、あのとんでもない罪を犯したことを後悔して生きていくのです。

1節で、私たちはナタンに紹介されます。彼は聖書の中でもっとも勇気ある人のひとりです。ダビデは笏をほんのちょっと上げただけで、無言でこの大胆不敵なナタンを死刑に処することもできたのです。でも、その事実もナタンを止めることはありませんでした。

(II サムエル記12:1)「【主】がナタンをダビデのところに遣わされたので、彼はダビデのところに来て言った。『ある町にふたりの人がいました。ひとは富んでいる人、ひとは貧しい人でした。』」

ナタンはダビデに物語を語ります。この物語は、まるでダビデが鏡を覗き込んでいるような話です。神さまのみことばは、私たちが本当はどのような者であるかを明らかにする鏡です。ナタンは、ダビデが自分を良く見ることができるよう、鏡を掲げるのです。おそらく、国の仕事に小休止があったときにナタンが来たのでしょう。ナタンは神さまの預言者でしたから、ダビデは彼に

「私に何か主のことばがあったかね？」

と言いました。ありました。神さまはナタンにひとつの町にいたふたりの人の話をされました。ひとは金持ちで、ひとは貧しい人でした。貧しい人たちの住む地域と、金持ちの地所のある、典型的な町でした。

(II サムエル記12:2-3)「『富んでいる人には、非常に多くの羊と牛の群れがありますが、貧しい人は、自分で買って来て育てた一頭の小さな雌の子羊のほかは、何も持っていませんでした。子羊は彼とその子ど

もたちといっしょに暮らし、彼と同じ食物を食べ、同じ杯から飲み、彼のふところやすみ、まるで彼の娘のようでした。』

金持ちと貧しい人の話は、ごくありふれたものでした。金持ちは多くの羊と牛を持っていました。貧しい人は、たった一頭の子羊しか持っていませんでした。この子羊はペットであり、家族に心から愛されていました。彼らはこの子羊を養いました。きっと太った子羊だったでしょう。この子羊は貧しい人のすべてでした。何と対照的なことでしょう。金持ちと貧しい人の間には、ずっと戦いがあります。私は個人的には、今日の大きな問題は、人種の問題ではなく、資本家と労働者、金持ちと貧しい人の間の摩擦だと思っています。

(II サムエル記12:4)『あるとき、富んでいる人のところにひとりの旅人が来ました。彼は自分のところにきた旅人のために自分の羊や牛の群れから取って調理するのを惜しみ、貧しい人の雌の子羊を取り上げて、自分のところにきた人のために調理しました。』

ナタンはとても聞きなれた物語を話していると思いませんか？ 貧しい人は、小さな雌の子羊のほかは、何も持っていませんでした。金持ちはすべてを持っていました。でも、彼はけちんぼうでした。

私はあまり政治の話はしないのですが、今日の罪の世に働いている原則を示しましょう。政党は、自分の党の候補者が選ばれて欲しいので、自分たちはこの世の問題のための解決策を持っている、と公言することに私は気づきました。私は人間は信用していません。貧しい人を擁護する政治家は今日ひとりもいないと信じています。貧しい人たちは今までも擁護されたことはないし、これからも擁護されることはありません。そのことについて、自分たちをだますのはやめにしようじゃありませんか。政府の貧民救済プログラムは、なかなか興味深いものです。彼らは金持ちに税金を課しますか？ いいえ、とんでもない！ 残りの私たちの税金が上がるのです。みなさん。彼らは確かに、私から小さな雌羊を取り上げています。

(II サムエル記12:5)「すると、ダビデは、その男に対して激しい怒りを燃やし、ナタンに言った。『【主】は生きておられる。そんなことをした男は死刑だ。』

ダビデは、ナタンが王国の誰かに起こった出来事を持って来て、ダビデに採決して欲しいと願っているのだと思いました。ダビデには善悪の分別がありました。彼にはまた、正義の知恵もありました。彼は赤毛で、熱しやすいタイプです。ナタンの物語を聞いたとき、彼はおそらく王座から飛び上がって要求したことでしょう。「その男はどこにいる？ 逮捕しろ。死刑だ！」

誰かほかの人のうちに罪を見つけるのはたやすいことですが、自分の人生の罪は見ることができないと言うのは面白いことです。ダビデの問題はそれでした。

(II サムエル記12:6)『その男は、あわれみの心もなく、そんなことをしたのだから、その雌の子羊を四倍にして償わなければならない。』

ダビデは説教者のように聞こえると思いませんか？ ほかの人に説教したり、その人の間違いを指摘したり、分析したり、こうしろあしろと言うのは簡単です。私たちのほとんどは、アマチュア心理学者です。ほかの人たちを私たちの‘クリティカル・カウチ’(訳注:よくアメリカのテレビ／映画や漫画などで見かける、心理学者のオフィスの長いす)に座らせ、治療するのです。ダビデもそうでした。ダビデは言います。

「その男がどこにいても、正義が行われるようにするのだ。」

(II サムエル記12:7-8)「ナタンはダビデに言った。『あなたがその男です。イスラエルの神、【主】はこう仰せられる。「わたしはあなたに油をそそいで、イスラエルの王とし、サウルの手からあなたを救い出した。さらに、あなたの主人の家を与え、あなたの主人の妻たちをあなたのふところに渡し、イスラエルとユダの家も与えた。それでも少ないというのなら、わたしはあなたにもっと多くのものを増し加えたであらう。』」

これをダビデに言うには、ナタンは勇気が必要でした。私の判断では、ナタンは聖書の中ではもっとも勇気のある人物です。私は、彼に比べることでできる人物は誰も知りません。彼は言いました。

「ダビデよ。あなたは有罪です。」

ダビデはどうするでしょう？ 彼は普通でないことをします。それだけは確かです。マーゴリウス博士(Dr. Margoliouth: 1820年にユダヤ人の両親の元に生まれ、1838年にキリスト教に回心。ダブリンのトリニテ

イー大学で学び、1844年に牧師として任命される。Journal of the British Archaeological Association
より)は、このように言いました。

「前にも、このとき以降にも、いつこのようなことが起こったのだろうか。スコットランドの女王、メアリーなら、自分は法の上にいる、と宣言したことだろう。チャールズ I 世ならバテ・シェバを見捨てただろう。ジェームス II 世なら、彼女の性格をののしるための証人を雇ったことだろう。モハメッドなら、両方の犯罪を正当と認める啓示を作り出したことだろう。チャールズ II 世なら、十戒の第七戒を公に廃止したことだろう。エリザベス女王なら、ナタンを停職にしたことだろう。」

ずっと昔、ウィンザー公なら、彼女のために自分の王位を放棄したことでしょう。アメリカには、十戒を廃止してナタンを最高裁に任命したかも知れないような幾人かの大統領がいました。ダビデはそのどれもしませんでした。彼の行動は、彼の偉大さを明らかにしています。

神さまは、何でもダビデの心の欲するものをくださったことでしょうが、ダビデは、自分の物ではないものを求めたのです。今日の新しい道徳は、これは罪ではなかった、と言います。しかし神さまはこれは罪だと言われ、神さまの心にかなう人でも、上手くやり過ごすことはできません。

(II サムエル記12:9)「『それなのに、どうしてあなたは【主】のことはをさげすみ、わたしの目の前に悪を行ったのか。あなたはヘテ人ウリヤを剣で打ち、その妻を自分の妻にした。あなたが彼をアモン人の剣で切り殺したのだ。』」

ナタンは罪をはっきりと指摘します。

みなさん。ナタンがダビデに言ったことを聞いたとき、宮廷がショックに包まれたことを想像できませんか？ 疑いもなく、そこには何が起こったかを知らない人々が大ぜいいました。彼らは、ありとあらゆる罪のうち、もっとも残忍な罪でナタンがダビデを糾弾するのを聞きます。ダビデは、神さまが「してはならない」と言われたことをしたのです。

ダビデはこのままですむでしょうか？

(II サムエル記12:10)「『今や剣は、いつまでもあなたの家から離れない。あなたがわたしをさげすみ、ヘテ人ウリヤの妻を取り、自分の妻にしたからである。』」

「クリスチャンが罪を犯すことができるか？」という問いが出てきたとき、それに対する答えは、できる、です。罪を犯すとき、あなたは神さまをさげすむことになります。神さまがそう言われるのです。ダビデがウリヤの妻を取って自分の妻としたとき、彼は神さまをさげすんでいたのです。

(II サムエル記12:11)「『【主】はこう仰せられる。「聞け。わたしはあなたの家の中から、あなたの上にわざわざ引き起こす。あなたの妻たちをあなたの目の前で取り上げ、あなたの友に与えよう。その人は、白昼公然と、あなたの妻たちと寝るようになる。』」

彼自身の家の中から、ダビデの上にわざわざ引き起こされます。そしてみなさん。次の章ではダビデの子どもたちの間にひどいスキャンダルが起こります。それはダビデの心痛となります。でも、彼はそのことについて泣き言を言ったり、神さまに叫んだりはしません。なぜなら、ダビデは神さまが自分の背中にむちをくわえておられることを知っていたからです。ダビデが欲しかったすべてのものは、詩篇42:1に書いてあります。

(詩篇42:1)「鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ。私のたましいはあなたを慕いあえます。」

(II サムエル記12:12)「『あなたは隠れて、それをしたが、わたしはイスラエル全部の前で、太陽の前で、このことを行おう。』」

ダビデ、悔い改める

(II サムエル記12:13)「ダビデはナタンに言った。『私は【主】に対して罪を犯した。』ナタンはダビデに言った。『【主】もまた、あなたの罪を見過ごしてくださった。あなたは死なない。』」

ダビデは、この犯罪のために死ぬべきでした。神さまはダビデのいのちを助け、彼の罪を忘れてくださいましたが、ダビデの赤ん坊が死にました。神さまはダビデが上手くやりおおせるようにはされませんでした。

(II サムエル記12:14)「『しかし、あなたはこのことによって、【主】の敵に大いに悔りの心を起こさせたので、あなたに生まれる子は必ず死ぬ。』」

そしてみなさん。主の敵は今もダビデがしたことによって神さまを冒瀆します。私がロサンゼルス・ダウンタウンで牧師をしていたとき、未信者や懐疑主義者たちが私のところにやって来て、

「神さまがダビデのような男を選ぶなんて！」

と言ったことが何回もありました。彼らは実際、私の答えを待つ間、意地悪な目つきで私のことを眺めていました。神さまはダビデをまき小屋に連れて行かれます。

(II サムエル記12:15-17)「こうしてナタンは自分の家へ戻った。【主】は、ウリヤの妻がダビデに産んだ子を打たれたので、その子は病気になる。ダビデはその子のために神に願い求め、断食をして、引きこもり、一晩中、地に伏していた。彼の家の長老たちは彼のそばに立って、彼を地から起こそうとしたが、ダビデは起きようとせず、彼らといっしょに食事を取ろうとしなかった。」

ダビデは神さまの御前にて、この小さな子どものいのち乞いをしました。ついに彼らは、子どもが死んだと言う知らせをダビデに持ってきました。

(II サムエル記12:19-20)「しかしダビデは、家来たちがひそひそ話し合っているのを見て、子どもが死んだことを悟った。それでダビデは家来たちに言った。『子どもは死んだのか。』彼らは言った。『なくなりました。』するとダビデは地から起き上がり、からだを洗って身に油を塗り、着物を着替えて、【主】の宮に入り、礼拝してから、自分の家へ帰った。そして食事の用意をさせて、食事をとった。」

ダビデの家来たちはあつげにとられました。子どもが生きていたときにはダビデは荒布をまとい灰の中にいました。子どもが死んだとき、彼は悲しみで我を忘れてしかるべきでした。その代わりに、彼は起き上がり、からだを洗って着物を着替え、そのあと“神さまを礼拝するために、宮に入りました。”ダビデのしもべたちは説明を求めます。

(II サムエル記12:22-23)「ダビデは言った。『子どもがまだ生きている時に私が断食をして泣いたのは、もしかすると、【主】が私をあわれみ、子どもが生きるかもしれない、と思ったからだ。しかし今、子どもは死んでしまった。私はなぜ、断食をしなければならないのか。あの子をもう一度、呼び戻せるであろうか。私はあの子のところに行くだろうが、あの子は私のところに戻っては来ない。』」

ダビデは小さな赤ん坊が救われていることを知っていました。彼は言いました。

「私はいつかあの子のところに行くだろう。」

ダビデは、自分の死のときが来たなら、自分が息子ともう一度会うことを知っていました。

小さなうちに亡くなる子どもは、主のもとに行きます。マタイの福音書18:10にこう書かれています。

(マタイ18:10)「あなたがたは、この小さい者たちを、ひとりでも見下げたりしないように気をつけなさい。まことに、あなたがたに告げます。彼らの天の御使いたちは、天におられるわたしの父の御顔をいつも見ているからです。」

この節の“天の御使い”は「霊」と訳されるべきことばです。小さな赤ん坊が今日死んだら、その赤ん坊はすぐに主のもとに行きます。神さまのみことばはそのように教えています。あなたはどうか分かりませんが、このことは私にとっては大きな意味があります。なぜなら、私には、天に小さな子がいて、いつかその子といっしょにいられる日を心待ちにしているからです。

ダビデは、自分の赤ん坊が死んだときに喜ぶことができました。なぜなら、彼はいつか再びその子に会うと知っていたからです。何年もあとにアブシャロムが死んだときには、そうではありませんでした。アブシャロムはダビデにとって心痛でした。アブシャロムが死んだとき、ダビデは声を上げて泣き、嘆きました。なぜでしょう？ダビデはアブシャロムが救われていたかどうか、確信がなかったからです。

ソロモンの誕生

(II サムエル記12:24-25)「ダビデは妻バテ・シェバを慰め、彼女のところに入り、彼女と寝た。彼女が男の子を産んだとき、彼はその名をソロモンと名づけた。【主】はその子を愛されたので、預言者ナタンを遣わして、【主】のために、その名をエディデヤと名づけさせた。」

“エディデヤ”という名前は、「主に愛されている者」という意味です。この名前はナタンを通して、神さまからソロモンに与えられました。

ダビデとヨアブ、ラバを取る

(II サムエル記12:26-29)「さて、ヨアブはアモン人のラバと戦い、この王の町を攻め取った。ヨアブはダビデに使者を送って言った。『私はラバと戦って、水の町を攻め取りました。しかし今、民の残りの者たちを集めて、この町に対して陣を敷き、あなたがこれを攻め取ってください。私がこの町を取り、この町に私の名がつけられるといけませんから。』そこでダビデは民のすべてを集めて、ラバに進んで行き、これと戦って、攻め取った。」

ダビデは今、もともとずっといるべきであった戦場に再び出ています。ダビデの王国は続けて拡張され、ダビデはその時代の偉大な支配者になります。彼の罪はどうなったでしょう？ 上手くやりおおせたのでしょうか？ 次の章で、ダビデにはとんでもない犯罪を犯した息子がいたことが分かります。彼は、半分血のつながった妹である、ダビデの娘を強姦しました。この娘の兄であるアブシャロムは彼を殺しました。まったく、とんでもないスキャンダルです！ そのニュースがどのようにイスラエル中に広まったか、想像できますか？ 人々は言いました。

「私たちを治めている王さまを見てごらん。彼は自分の家族さえも治められないんだよ！」

かわいそうなダビデ！

ダビデの生涯を学び終える前に、私は主に

「もう十分彼をこらしめたではありませんか。もう彼の背中からむちを取り除いても良いんじゃないですか？」と言いたくなります。でも、ご存知のように、ダビデは決してそのようなことは言いませんでした。ダビデは主の御前に出て行き、叫びました。

(詩篇51:1-2)「私の言うことを耳に入れてください。【主】よ。私のうめきを聞き取ってください。私の叫びの声を心に留めてください。私の王、私の神。私はあなたに祈っています。」

(詩篇5:12)「【主】よ。まことに、あなたは正しい者を祝福し、大盾で囲むように愛で彼を囲まれます。」

ダビデは神さまとの交わりの中に、もう一度入れていただきたかったのです。